

熱帯労働の能力は比島のダヴァオに於ける四十年來のマニラ職栽培の成功が之を語る(六十七頁)など説いてゐるのは十分首肯出来る。今や歐洲戦争の進展に伴つて蘭領東印度の運命が注目的となつてゐるとき、第一回配本として此の地方が選ばれたのは好都合であつた。本書を読むものは同時にその裏に白人國の植民政策の眞髓が何であるかを常に考へねばならぬ。なほ附録として詳細な各種統計表や索引がついてゐることは編輯者の學的良好の現れとして敬意を表する。(河出書房、一冊參四十五拾錢)〔別枝篤彦〕

外蒙人民共和國

——ソ聯極東の前衛——

三島康夫 共著
後藤富男

今秋の讀書期は蒙古に關するものだけでも數種の上梓を見た。

一瞥しても翻譯ではラルソン「蒙古風俗誌」、カリニコフ「外蒙古」、ギルモア「蒙古人の友となりて」、著述では東亞問題研究會「蒙古要覽」、一寸範圍は異るが淺野利三郎「蒙古西亞民族の新研究」等誠に活氣に充ちてゐる。翻譯物は一流學者が蒙古に腰を落着けて研究執筆したものにだけに獨創性、深み、瞭然さを見るが、その内容には執筆者が外國人である爲に、所により免るべからざる主觀性が覗いたり、執筆時が多く一九三〇年以前である爲、今日吾國民の直接的な政治的、軍事的資料としては不十分な點なしとしない。従つてこの後者をも要望する向には前記の「蒙古要覽」や此「外蒙人民共和國」が讀まれねばならない。蒙古要覽がその要覽と

しての性質上、内蒙、外蒙のエッセンスを集録してゐるに對し、本書は外蒙古だけで一書を成し、鮮明を缺くとは云へ三十餘の圖版、地圖を有するので外蒙古の理解は非常に容易である。著述上の文獻に關しては最後の頁に「本書執筆に際しては、多數參考書を利用したが、就中陳榮祖「外蒙古獨立史」、コロストヴエツツ「蒙古近世史」、エドワード・ダンの「外蒙古の真相」、ゲルナルの「傳記デングス汗(何れも邦譯名)、カルリニコフの「外蒙人民共和國」ヤ・ルイデクの「外蒙の現状」、レヴィンの「蒙古」、善隣協會編の「蒙古大觀」、後藤富男の「蒙古政治史」等による處が多く、赤軍に關する部分は三島康夫前著「外蒙赤軍の全貌」等によつたが、猶ほ新しい資料に據つてこれに幾多の修正を加へた。一九三九年度の「新資料」を以て全般的に補正し得たのは著者等の喜びとするところである」と(傍註紹介者)。又筆者は共に善隣協會の錚々たる方々であるので、本書が戦時の物資不足から粗紙を用ひ、假綴の儘市場に出て居るとは云へ、決して拙速主義出版物と同列に置かるべきものでなく、内容は讀者の多方面な要求を充すものと思ふ。はしがきに「極東の情勢に大なる變化が生じて、本書の企圖するその基本資料的意義は來るべき數年の間減殺されることはないであらう。渺たる小冊子ではあるが今後における我國の正しき對蒙政策の樹立に寄與するところがあれば幸ひである……」とあるのにも著者の意圖と自信が伺はれる。次に目次の大綱を掲げてこの紹介を終る。

第一章 危ない哉外蒙古

第二章 外蒙古とはどんな處か

第三章 革命前の外蒙古

第四章 蒙古人民共和國の成立

第五章 共和國成立後の政治概観

第六章 外蒙の反ソ獨立抗爭史

第七章 資源と産業

第八章 共和國の財政と經濟

第九章 宗教、文化、教育

第十章 最近の外蒙軍事

(四六版、二六七頁、圖版三二、卷末折込地圖一、東京 伊藤書店
刊、昭和十四年十月、壹圓八拾錢) (淺井辰郎)

尙書正義定本

東方文化研究所經學文學研究室編

漢の武帝が儒家の經典をもつて思想の統一を計つて以來ずつと清朝の終まで二千年の間、支那の精神文化を國家的に公式に規定して來たものは經學である。支那の知識階級は官僚によつて代表されてゐたが、その官僚は經學的教養によつてその地位を獲得しまた維持して來た。概論的にいふならば、經學は、彼等の生活意識が經典及び經師の傳統を所與の範型としてその型式下に具現してゐるものである。その型式が極めて鞏固に定形化されてゐた爲にどの述作もマンネリズム的な外貌を呈し個性の色彩を稀薄にしてはゐるけれども、しかし經學的述作は遂にその作爲された

際の時代表思想の創作的な表現であることを看過してはならない。彼等が「經書に書いてある」こと「むかしあつた」こととして意味してゐるのである。換言すれば超時間な當爲を彼等の現在に於て把握し主張してゐるのであつて、過去に當てあつた歴史的な一事件の爲に述べてゐるのではない。従つてもし經書の記事を資料として古代史を攻究せんとする人々が、經學者の述作に古代史學的な期待を以て臨むならば、それは初めから見當を逸してゐる。

經學的述作の一である尙書正義に對する從前の非難は實はかうした見當違ひの要求の満たされぬことから放たれてゐた。歷史上に於ける堯舜及び夏殷周三代の文化を闡明する上からいつて、尙書正義三十萬言はいたづらなる贅言の繰り返してあり退屈と滯滯以外の何物でもないにしても、尙書正義のもつ本來の價值はそれによつていさゝかも損はれはしない。尙書正義はこの冗長に似た繰り返しに、その時代すなはち支那中世の經學界の主潮の認識を要求してゐるのである。正義の敘述を繁雜ならしめてゐる要因として、直接經文に臨まずして傳注を介在せしめてゐることや、注釋に討論の形式が用ひられてゐること、訓詁の爲の訓詁を加へてゐることなどが、單に外形上から見ても著しく眼につく。しかし此等は同時に支那中世の思潮の主要なる類型をあらはしてゐるものなのである。これに關しては東方文化研究所經學文學研究室主任研究員吉川幸次郎氏によつてなされた尙書正義解題(東方學報京都第十册第三分)を参照されたい。加るに尙書正義は唐の勅撰書で